kyndryl

AI 時代を見据えた柔軟なインフラへの移行でオンプレとクラウドの垣根を越えた全体最適の運用へ

アフラック生命保険株式会社 ｜ 保険



「AX@Aflac」の具現化に欠かせない変化に強い IT インフラ

1974 年に日本で初めてがん保険を提供する保険会社として創業したアフラック生命保険。がん保険・医療保険を中心に「生きる」を支える商品・サービスを提供してきました。同社が取り組むのが、デジタル技術によってお客様体験や業務のあり方を変革するためのコンセプトである「AX@Aflac」です。

従来は「DX@Aflac」を旗印に最新デジタル技術の活用を積極的に推進し、ビジネスを進化させてきました。その考え方をアップデートした背景にあるのが、生成 AI の急速な実用化です。AI を単なる効率化のツールとしてではなく、人と AI が密接に協働しながら顧客体験や社員の働き方そのものを作り変えていく存在として捉え直したのです。

同社 IT インフラ運用管理部長の正木聡氏は「AI を中核能力に据える以上、それを支える IT インフラにも、ビジネスの変化に応じて柔軟に構成を変えられる拡張性が求められます。基盤が硬直的なままでは、AI を軸とした変革の足かせになりかねません」と語ります。

もっとも、IT インフラ運用管理部は、AX@Aflac が打ち出される以前から、変化に強い基盤づくりが求められることを見据え、着実に手を打ち続けてきました。

2022 年頃からは、新規構築するシステム領域にはクラウドネイティブの思想を積極的に取り入れつつ、既存システムについては、標準 OS の EOS（サポート終了）を機にクラウド移行（PaaS 化）を実施。加えて、不要なシステムを整理・廃止（デコミッション）しながら、インフラの最新化とクラウド化を一体で進めるロードマップを策定し、具現化してきました。

クラウド移行に伴う応答速度の低下を懸念

当初のロードマップでは、クラウド移行の対象となったシステムは 100 近くに上ります。移行先のクラウドには Amazon Web Services（AWS）を選定し、2025 年から 2026 年にかけて集中していた EOS 期限を見据えながら、計画的に移行を進めています。

その中で、すべてのシステムを一律にパブリッククラウドへ移行することは現実的ではありませんでした。保険金支払いに関わるオンライン取引のように、メインフレームとの連携が密なシステムでは、業務に支障を来すレイテンシー（遅延）が生じる恐れがあるためです。

その具体的な例の 1 つが、ユーザーが日々触れるフロントエンドシステムとバックエンドのメインフレームの処理をつなぐシステムでした。当初、同システムを AWS リージョンに移行し、フロントエンドとメインフレームとの間を専用線（AWS Direct Connect）で接続する計画を策定したものの、通信の遅延により想定した応答速度の要件を満たせなくなることが発覚したのです。

とはいえ、一部のシステムだけを従来のプライベートクラウド環境に残す判断は得策ではありませんでした。大半のシステムが AWS へ移行していく中、運用効率の課題が生じるためです。

同社 IT インフラ運用管理部 武藤正純氏は「オンプレミスとクラウドで運用管理の手法やツールが異なれば、二重運用がいつまでも続いてしまい全体最適を妨げてしまいます。将来的な運用効率を考慮すると、同じ AWS のソリューションで統一することが望ましいと考えました」と当時を振り返ります。

クラウドのアーキテクチャーや運用をオンプレミスでも実現

こうした課題を解消するソリューションとして浮上したのが AWS Outposts でした。これは AWS のクラウドサービスと同じインフラや運用ツールを、企業側のデータセンター内に設置した専用ハードウェア上でそのまま利用できるサービスです。

「応答速度の性能要件を満たしながら、オンプレミスもクラウドも同じコンソールから同じサービスでログを確認できるメリットは非常に大きいと感じました。オンプレミスの運用を AWS リージョンと同等にすることを目指し、キンドリルにも支援をもらいながら、クラウドの思想に基づく運用をゼロから設計し直しました」（武藤氏）

AWS Outposts の導入では、まず開発環境で約半年をかけて検証を実施しました。

同社はメインフレームが稼働する本番サイト、災害対策サイト、さらには多くのシステムのクラウド移行先である AWS の東京・大阪リージョンなどをあわせて 4 つのリージョンが連携する構成を取ります。災害発生 1 つにしても、さまざまなパターンを考慮しなければならない中で、設計には頭を悩ませたと武藤氏は振り返ります。

AWS Outposts の冗長性対策としては、1 つのサーバーが 1 つのアベイラビリティゾーン（AZ）に紐づく制約を踏まえ、2 台の AWS Outposts を異なる AZ に接続する構成を採用しました。

同社 IT インフラ運用管理部 中村洋子氏は「本番環境への影響を最小限に抑えながらクラウド側とどう接続するかを検討する必要がありました。この設計にはキンドリルのサポートが不可欠でした」と話します。



アフラック生命保険株式会社について

アフラック生命保険株式会社は、1974 年に日本で初めてがん保険を提供する保険会社として創業。がん保険・医療保険を中心に「生きる」を支える商品・サービスを提供してきました。現在は AX@Aflac の推進によって、お客様体験や業務のあり方の継続的な変革に取り組んでいます。



ハードウェア資産の保守体制も、重要な検証項目の 1 つでした。AWS Outposts のハードウェア自体は AWS の資産ですが、データセンターに設置されたアプライアンスである以上、緊急時にスムーズに現地対応できる体制が欠かせません。

武藤氏は「ファームウェアの不具合やハイパーバイザーのエラーといった専門的な場面でも、知見のあるキンドリルに対応してもらったことで助かっています」と評価します。

プロジェクトを進める上では、社内外を横断した調整も欠かせませんでした。同社が利用する AWS 環境の管理権限の大半は持株会社である Aflac Inc. が持っており、AWS Outposts の導入も日本単独では完結しません。

「AWS Direct Connect の接続や必要な IAM 権限の取得には、米国側との連携が必要でした。米国側にとっても AWS Outposts 導入は初めてであり、非常に密に連携をとりながら構築を進めました。加えて、データセンターを運用する複数のベンダーとの調整も必要でしたが、こうした複雑なやり取りについても、キンドリルや AWS との密な連携により、うまく進めることができました」（中村氏）

さらに武藤氏も「各領域に精通する関係者が知見を持ち寄った体制を組成し、協調して機能したことが今回の導入における大きな成功要因だと思います」と強調します。

このプロジェクトによる進歩

- メインフレームと連携する最重要システムを、応答速度の要件を満たしつつ AWS 環境へ統合
- オンプレミスとクラウドのアーキテクチャー・運用ツールを統一し、キンドリルと共通言語での運用体制を実現
- 社内外のステークホルダーを巻き込む複雑なプロジェクトの中でも、重要システムの移行をスムーズに完了
- 100 近くに及ぶクラウド移行対象のシステムのうち、2026 年度中に全体の 8 割程度が移行完了見込み

アーキテクチャー統一が生んだ「共通言語」クラウド移行の真価を実感

こうしてアフラックの中でも重要な位置づけにあった本システムの AWS Outposts 上への移行は、2026 年 4 月に完了しました。

正木氏は「キンドリルは、当社のアプリケーションやメインフレームについて、業務面も含めてよく理解してくれているという安心感があります。システムをどこに載せ、どのように移行するかという話だけでなく、切り替え時の業務影響までしっかり共有し、一緒に組み上げることができました」と振り返ります。

本プロジェクトを通じて得られた最大の成果は、AWS でアーキテクチャーが統一された結果、オンプレミスとクラウドの間にあった運用の分断を解消できたことです。その範囲は自社内にとどまりません。

武藤氏は、「何かインシデントが生じた際に、日々の運用を任せているキンドリルと当社側で同じスキルセットを持って解決に当たれるようになりました。共通言語が生まれたことは、運用を特定の担当者の知見に依存しない体制づくりにも貢献しています」と話します。

また、クラウド活用を進める中で SRE（Site Reliability Engineering）の仕組みの導入をキンドリルと共に進めてきたことも、大きな変化の 1 つでした。

正木氏は、「クラウドを活用していく中で、アプリケーション側もクラウドネイティブな開発が求められるようになり、これまで基盤とアプリケーションの間にあった垣根が薄れてきていることを実感しています。以前は社員に直接相談が来ていたことが、今ではダイレクトにキンドリルへ相談が行くようになり、開発側から見てもキンドリルの『顔』が見えるようになってきました」と語ります。

数年間プロジェクトを進めてきたことで、クラウド移行の真価を、身をもって感じ取ることができたというアフラック。今回の取り組みをゴールではなく次への土台と位置づけ、AI 時代を見据えたインフラ変革のさらなる歩みを進めていきます。



正木 聡 氏
アフラック生命保険株式会社
IT インフラ運用管理部長



武藤 正純 氏
アフラック生命保険株式会社
IT インフラ運用管理部



中村 洋子 氏
アフラック生命保険株式会社
IT インフラ運用管理部



末弘 恵子
キンドリルジャパン
アフラック事業本部
カスタマーパートナー



森山 豊
キンドリルジャパン
アフラック事業本部
カスタマーエンタープライズ
アーキテクト



長田 將明
キンドリルジャパン
アフラック事業本部
プロジェクトマネージャー

© Copyright Kyndryl Inc. 2026.　無断転載を禁じます。

本資料は最初の発行日の時点で最新のものであり、Kyndrylによって随時通知なしに変更される場合があります。

すべての製品およびサービスが、Kyndrylが事業を展開しているすべての国において利用できるわけではありません。

Kyndrylの製品およびサービスは、それらが提供される際に適用される契約条件に従って保証されます。

引用されている性能データとお客様事例は、例として示す目的でのみ記載されています。

実際の結果は特定の構成や稼働条件により異なる場合があります。